

文化財関係研修の実施

中近世城郭調査課程

2002年9月26日～10月3日実施の同課程は、北は秋田、南は鹿児島から総数21名の研修生が受講しました。実質僅か5日間の研修ですが、城郭の発掘から整備にいたる総合的な研究の現状と城郭調査の方法論の理解を目指し、少し欲張って諸分野の先生方15人を講師にお招きしました。また今回、城郭の発掘調査の実際を理解して貰うために、各地の城郭の発掘調査ケーススタディと城郭付属遺構調査方法論を重視したカリキュラムを組みました。

研修生の反応は概ね好評でしたが、彼らの多くは考古学専攻で、専門以外の分野からの城郭研究、特に文献史学に関する講義に関心が非常に高く好評であった一方、各地の個々のケーススタディよりも基本的な城郭の考古学的発掘調査方法論（マニュアル）や実際の城郭遺跡での臨地講義を望む声が多くありました。研修期間、講義構成など反省すべき点多々ありますが、今後の研修に生かしたいと思っています。（埋蔵文化財センター 巽淳一郎）

発掘技術者研修「交通遺跡調査課程」

2002年10月23日～30日（8日間）の研修は、近年検出例が増加している道路遺構の構造や発掘調査上の留意点を習得してもらうとともに、古代の水陸交通体系やその諸施設に関わる専門的知識を身につけてもらい、交通関係遺跡・遺構をどう位置づけるかという糸口を得てもらうことを目的としたもので、今回初めて企画した研修で、かなり特殊な限定的な内容の研修でしたが、16名が受講しました。

カリキュラムには、「道路遺構の構造と調査上の留意点」「郡衙遺跡と交通」、北陸や関東・九州の事例報告などの考古学サイドの講義とともに、「古代の交通システム概論」「歴史地理学と交通路」など文献史学・歴史地理学という関連分野からの講義をも加え、また、座学ばかりでなく、兵庫県龍野市小犬丸遺跡や上郡町落地遺跡という山陽道駅家跡の現地に出かけた臨地講義も組み入れました。

研修生はそれぞれ交通遺跡の調査研究に関心を持って参加しただけに、熱心な受講態度でした。

研修内容は、少し時間の足らなかった講義もありましたが、有意義との評価を得ました。とくに、山

陽道駅家跡の遺跡現地にバスで出かけ、古代山陽道の路線をたどったり、遺跡の立地や現地に残る基壇や築地堀の痕跡とみられる土塁などを観察したことは、駅家の構造や官道のあり方を理解する上で大変大きな収穫であったと好評でした。

（埋蔵文化財センター 山中敏史）



兵庫県上郡町

落地遺跡での臨地講義

観光と遺跡

「観光」という言葉から皆さんが思い浮かべるイメージはどのようなものでしょうか。日常生活から離れて解放的な気分の下で遊覧を楽しむ、といったイメージの方も多いのではないのでしょうか。観光研究者の最大公約数的な定義は、堅苦しい表現ですが「通常居住地域を一時的に離れ、非日常的で好ましい空間と時間を消費（享受）すること」といったところです。蛇足ながら、こうした空間と時間の消費が観光者（「観光客」）自身の活力再生産の源になることは言うまでもありません。

ところで、観光地は、それ自体が観光の対象となる「観光資源」だけでは成立しません。魅力的な観光地であるためには、優れた観光資源の存在とともに、交通機関も含めた観光資源を利用するための良好な「観光施設」の存在が不可欠です。俗にアゴ（食事）アシ（交通）マクラ（宿泊）といわれますが（実はその前にイノチ（治安）がある）、交通の便が悪くなく、良好な宿泊施設と飲食施設が備わり、かつそれらの施設におけるサービスが適正な対価で提供されることが必要というわけです。

遺跡は観光資源としての資質を備えています。遺跡は現在から時間的に隔たった空間を残す場所であり、そうした意味で非日常的な空間であるからです。したがって、遺跡を観光資源として活用するという

アイデアは決して的外れではありません。もちろん、そのためには遺跡保存の措置ならびに観光者との良好な関係を取り結ぶ仕掛けが必要であり、遺跡保存整備がそうした役割を担うことになります。もちろん、遺跡を保存整備すれば、観光資源となりうるということではありません。個々の遺跡の観光資源としての資質が大きく関係するからです。また、観光資源とはなりえても地域が観光地として立ち行くとも限りません。観光資源として単独で魅力的な遺跡はきわめて少ないし、良好な観光地であるためには良好な観光施設も不可欠な要素であるからです。

遺跡研究室で昨年からおこなっている大規模遺跡の整備・管理・活用に関する研究では、こうした観光と遺跡の関係という視点も含めたアプローチをおこなっているところです。

(文化遺産研究部 小野健吉)



白水阿弥陀堂（福島県いわき市）

園池を発掘・整備し、観光資源的価値を増進

平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事

文化庁が進めている平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事は、基壇下部の凝灰岩化粧工事を完成させました。大極殿正殿本体は、基壇内の免震装置を本年4月半ばから設置し始める予定で、基壇上面の完成は来年2月末になる予定です。2003年2月末現在、



大極殿基壇全景（南東から）

素屋根の建設基礎工事に着手しており、完成は2004年1月末の予定です。写真は、今年1月初めの工事進捗状況です。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊康史)

研究室紹介

保存修復科学研究室（埋蔵文化財センター）

Conservation Science Laboratory

保存修復科学研究室は、遺跡・遺物の保存と修復に関する科学的調査・研究をおこなっています。基礎研究として遺跡の構築部材や出土遺物に関する材質および構造研究と新しい調査法に関する開発研究もおこなっています。また、平城宮跡などから出土した遺物の実際的な処理をおこなうと同時に、技術的開発研究とその実用化もすすめています。

当研究室では、これらの新しい調査法や保存修復技術に関する情報を、学会や保存科学研究集会をはじめ、地方公共団体の発掘技術者を対象とした保存科学研修などを通じて公開しています。また、協力事業の一環として、地方公共団体などがおこなっている発掘調査や整備事業において、遺物の取り上げや応急処置をはじめ遺構の修復処理や復元法に関する専門的・技術的指導と協力をおこなっています。これらの活動は国内だけではなく、広く海外にもおよびます。2002年度は、ユネスコが実施したクムトラ千仏洞における現地環境調査と壁画顔料の材質調査の協力をはじめ、中国・炳靈寺文物保護研究所（甘粛省）が実施した涅槃塑像の修復事業の協力やイースター島・モアイ石像の保存処理に関する基礎研究をチリ国立文化財保存修復研究所と共同で実施しました。

最近おこなった開発研究では、オートラジオグラフィを利用した材質調査があります。この方法は遺物から発生している微弱な放射線を二次元放射線検出器としてのイメージングプレートに放射線エネルギーとして蓄積する方法で、レーザー励起によるルミネッセンス量をデジタル化して数量化・画像化することによって古代ガラス材質の同定を可能としました。この開発によって一度に数百点の古代ガラス遺物の材質同定が可能となり、日本列島における古代ガラスの流通が解明されることが期待されます。将来は、さらに他の遺物へと応用が広がる画期的な